

彙報

一 京都哲学会委員の異動

平成五年四月一日付をもって松田素二氏(社会学講座助教授着任のため)、そして、平成六年四月一日付をもって加藤尚武氏(倫理学講座教授着任のため)が新たに委員に加わられた。

二 京都哲学会公開講演会記事

平成五年度の京都哲学会公開講演会は十一月三日午後一時より、楽友会館において、左記の如く行われた。

一、美学と二つの形而上学

京都大学助教授岩城見一氏

一、進化と種の分岐——ダーウィンとウォレスの違い——

京都大学教授内井惣七氏

講演会は、数多くの会員の方々の出席を得、盛会であった。また、終了後、楽友会館において、多数の会員が講演者と晩餐を共にしつつ、討論、歓談のひとつときをすごした。

三 外国哲学者来訪講演会記事

デヴィッド・シェリー博士(北アリゾナ大学教授)

平成五年四月三十日於文学部

「数と数字について」

ルードヴィッヒ・ズイーブ博士(ミュンスター大学教授)

平成五年十月十六日於芝蘭会館

「フィヒテとヘーゲル——自由をめぐる——」

四 京都大学文学部哲学科講義題目

——平成六年度——

※……文学部2回生が履修できる学部科目

〔共〕……大学院と共通

〔院〕……大学院のみ

哲学

講義 助教授 伊藤 邦武 哲学概論 ※

研究 教授 木曾 好能 ヒュームの哲学 〔共〕

” 総合人 磯江 景孜 18世紀ドイツ哲学思想の研究 〔共〕

” 人間・環境学 教授 安井 邦夫 現代論理学 〔共〕

” 講師 奥 正博 (倫理学専攻の欄参照) 〔共〕

” 講習 教授 木曾 好能 Rosenthal (ed.), *The Nature of Mind*, Oxford up, 1991 〔共〕

” 助手 浜野 研三 〔共〕

” 助教授 伊藤 邦武 F. P. Ramsey, *Philosophical Papers*, Cambridge up, 1990 〔共〕

演習	講師	早瀬 明	G. W. F. Hegel: Der Geist des Christentums und sein Schicksal	[共]	講師	矢野 道雄	Viṣṇubharmottarapurāṇa	[共]	
講読	講師	上枝 美典	E. Gilson: Being and some philosophers	※	講読Ⅰ	教授	徳永 宗雄	Erich Frauwallner, Geschichte der indischen Philosophie, II. Band: Die naturphilosophischen Schulen und das Vaiśeṣika-System	※
講師	倉田 隆	R. Descartes: La Recherche de la Vérité	[共]	講読Ⅱ	教授	徳永 宗雄	Hermann Oldenberg, Kleine Schriften Ⅱ	[共]	
教授	磯田 隆	演習(2)近世哲学の諸問題	[院]	中国哲学史					
インド哲学史				研究	教授	内山 俊彦	中国哲学史概説	※	
講義	教授	徳永 宗雄	インド思想史	※	教授	内山 俊彦	中国古代の唯物論思想	[共]	
研究	教授	徳永 宗雄	医学文献に見られる哲学思想	[共]	教授	池田 秀三	韋昭の学問	[共]	
人文研	井狩 弥介	ヴァードゥラ・シュラウタスー トラ研究	[共]	教授	吉川 忠夫	(東洋史学専攻の欄参照)	[共]		
講師	後藤 敏文	インド・イラン語文献文選	[共]	講師	坂出 祥伸	術教思想の諸問題	[共]		
講師	近藤 治	(西南アジア史学の欄参照)	[共]	講師	武田 時昌	京氏易と先天易	[共]		
講師	竹中 智泰	インド古典論理学概説	[共]	講師	内山 俊彦	『論衡校釈』	[共]		
演習	助教授	小林 信彦	(梵語学梵文学専攻の欄参照)	演習	教授	池田 秀三	黄宗義『破邪論』	[共]	
助教授	藤井 正人	Upaniṣad	[共]	助教授	西脇 常記	贊寧『僧史略』	[共]		
				助教授	妻谷 邦夫	道教思想資料	[共]		
				助教授	木島 史雄	王利器『經典积文考』のち『經典积文序録』	[共]		
				助手					

"	教授	加藤 尚武	倫理學演習② (日本思想史)	"	人文研究	大浦 康介	(フランス語フランス文学の欄参照)
"	総合人文学部 教授	有福 孝岳	Kant: Kritik der Urteilskraft	"	講師	太田 喬夫	作品解釈の諸問題
"	演習Ⅱ 教授	加藤 尚武	倫理學の諸問題	"	講師	吉田 友之	『看聞日記』の絵画的的研究
"	講読 講師	倉田 隆	(西洋哲学史専攻の欄参照)	研究	講師	有賀 祥隆	仏画の諸問題
"	助手	浜野 研三	(哲学専攻の欄参照)	"	講師	辻 成史	図像解釈の諸側面
美学美術史学				演習Ⅰ	教授	清水 善三	美学美術史学の諸問題
"	講義 助教授	岩城 見一	美学の根本問題	演習Ⅱ	教授	清水 善三	美学美術史学の実地指導
"	教授	佐々木丞平	日本美術史概説	助教授	佐々木丞平	俊春	美学美術史学の実地指導
"	助教授	中村 俊春	西洋美術史概説	講師	加藤 哲弘	読	芸術理論関係ドイツ語文献の講読
研究	教授	清水 善三	日本彫刻史研究の最前線	"	講師	島本 澆	Michel Thévoz, L'academisme et ses fantasmes, Paris (Les éditions de Minuit), 1980.
"	教授	佐々木丞平	東洋の画論	"	助手	下野 健児	日本・東洋美術史料選読
"	助教授	岩城 見一	思弁的美学から実証的美学へ	"	社会学		
"	総合人文学部 助教授	篠原 資明	交通論と美学	"	講義 教授	筒井 清忠	社会学概論
"	総合人文学部 助教授	岡田 温司	マニエラからバロックへ	"	教授	宝月 誠	社会人間学
"	人文研究 教授	曾布川 寛	中国絵画史	研究	助教授	松田 素二	民族論

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

"	総合人間学教授	高橋 三郎	強制組織論	〔共〕	講読	助教授 松田 素二	社会人間学の視点(2)
"	総合人間学部助教授	高橋 由典	行為と意識	〔共〕	"	助手 吉田 純	英書講読
"	人文研究助教授	富永 茂樹	コミュニケーションの空間論基礎	〔共〕	独書講読		
"	東南アジア研究助教授	加藤 剛	東南アジアの社会と文化	〔共〕	宗教学		(Horst Reimann u. a., <i>Basale Soziologie: Hauptprobleme</i>)
研究	講師 中野 正大	社会学理論の構造	〔共〕	講義 助教授 藤田 正勝	宗教学概論	※	
"	講師 直井 優	社会階層調査の方法と解析	〔共〕	研究 教授 長谷 正当	認識と欲望Ⅱ	〔共〕	
"	講師 三島 憲一	思想は現代を読み取れるか	〔共〕	"	研究 講師 森 哲郎	〔共〕	
"	講師 牟田 和恵	性・家族・国家	〔共〕	演習 講師 土屋 博	キリスト教専攻の欄参照	〔共〕	
"	講師 梶田 孝道	国際社会学	〔共〕	演習 教授 長谷 正当	P. Tillich: <i>Systematic Theology</i>	〔共〕	
演習	教授 宝月 誠	社会人間学の諸問題	〔共〕	"	助教授 藤田 正勝	〔共〕	Schelling: <i>Über das Wesen der menschlichen Freiheit</i> 〔共〕
"	教授 宝月 誠	社会人間学の諸問題	〔共〕	"	講師 西村浩太郎	〔共〕	J. Lagneau: <i>De l'existence de Dieu</i> 〔共〕
"	教授 筒井 清忠	歴史社会学の諸問題	〔共〕	"	講師 芦名 定道	〔共〕	(キリスト教専攻の欄参照)
"	教授 筒井 清忠	歴史社会学の諸問題	〔共〕	講読 教授 長谷 正当	S. Weil: <i>L'Intuition préchrétienne</i> 〔共〕	〔共〕	
"	助教授 松田 素二	社会人間学の視点(1)	〔共〕	"	講師 仲原 孝	〔共〕	M. Heidegger: <i>Von der Wahrheit</i> 〔共〕
"	助教授 松田 素二	社会人間学の視点(2)	〔共〕				

仏教学

キリスト教学

講義	教授	御牧 克己	インド・チベット仏教思想史	※	講義	助教	藤田 正勝	(宗教学専攻の欄参照)
研究	教授	御牧 克己	インド・チベット仏教宗義書研究	[共]	研究	教授	長谷 正当	(宗教学専攻の欄参照)
"	人文研	荒牧 典俊	中国仏教思想史序説	[共]	"	講師	片柳 栄一	人間的自由をめぐる
"	人文研	井狩 弥介	インド哲学史専攻の欄参照	[共]	"	講師	土屋 博	キリスト教における教典の成立と受容
"	講師	丹治 昭義	中観思想研究	[共]	演習	教授	水垣 涉	Athanasius: De incarnatione Verbi
"	講師	一郷 正道	後期中観思想研究	[共]	"	教授	長谷 正当	(宗教学専攻の欄参照)
演習	教授	御牧 克己	梵語仏典選集	[共]	"	講師	林 忠良	S. Kierkegaard: Philosophiske Smuler
"	講師	榎本 文雄	パーリ語文選	[共]	"	講師	勝村 弘也	(ブライ語及び旧約釈義)
"	講師	中谷 英明	仏教混清梵語文選	[共]	"	講師	芦名 定道	P. Stuhlmacher, Vom Verste-hen des Neuen Testaments
講読I	教授	御牧 克己	E. Lamotte, Histoire du bouddhisme indien	[共]	"	講師	宮谷 宣史	(西洋哲学史専攻の欄参照)
講読II	教授	御牧 克己	E. Frauwallner, Die Philosophie des Buddhismus	[共]	"	講師	土井 健司	B. Lonergan: The Way to Nicaea
講読	助手	栗原 尚道	初級梵語仏典選集	[共]	講読	助手	土井 健司	
語学	助教	小林 信彦	サンスクリット初級文法	[共]	"	講師	内井 惣七	科学哲学入門
"	外国人	W. Knobl	サンスクリット	※	"	講師	松尾 幸孝	科学史概論
"	助手	高橋 慶治	チベット語(初級)	[共]	講義	教授	内井 惣七	科学哲学入門
"	講師	武内 紹人	チベット語(中級)	[共]	"	講師	松尾 幸孝	科学史概論

研究 総合人
教授 越野 茂美 (現代史学専攻の欄参照) [共]

教授 内井 惣七 十九世紀の科学と科学哲学

講師 佐野 正博 歴史における科学的思考

演習 教授 内井 惣七 論理学演習

内井『真理・証明・計算』(ミネルヴァ書房)

助教授 伊藤 邦武 (哲学専攻の欄参照)

講師 美濃 正 R. Boyd et al (eds.) The Philosophy of science, MIT Press [共]

講師 藪木 栄夫 (哲学専攻の欄参照) [共]

講師 小林 道夫 (哲学専攻の欄参照) [共]

教授 内井 惣七 科学史演習クーン『コペルニクス革命』(紀伊国屋)

教授 内井 惣七 科学哲学演習 (Van Fraassen, The Scientific Image (Clarendon Press))

五 京都大学文学部哲学科卒業論文題目

——平成三年三月——

哲学

川井 博之 ラッセルの「表示について」(“On Denoting”)

の功績と問題点

川谷 茂樹 カント『純粹理性批判』におけるカテゴリーの演繹について

久米 暁 ヒュームの『人間本性論』における観念と意味

新田 智弘 初期ハイデッガーにおける人間と存在者の存在について

橋本 啓介 フッサール中期思想における自然的態度について

訓 覇 圭 フッサールの相互主観性

内藤 可夫 ニーチェの「ニヒリズム」における生及び権力への意志

橋本 崇 シェリング「超越論的観念論の体系」論考

半田 恭彦 ホワイトヘッドの宇宙論——対立二概念の克服——

西洋哲学史

及川 和剛 フレーゲの実在論——〈思想〉と論理学の課題との関わりについて

橋本 健史 『バイドロス』のミュートスにおけるエラー

松本 祐史 カントの認識論——演繹論を中心に——

中国哲学史

龜田 勝見 王充の人間観

心理学

大草 知裕 正弦波格子刺激を用いた角度錯視の検討

大順 理英子 模写過程における情報処理について

片倉 淳子 広告表現における視覚的及び言語的要因の説
得効果についての一考察

金沢 創 泣くことの自然誌

小谷 英之 大学生の自殺観について

小林 未知 年齢に伴う時間評価の変化について

近藤 正裕 談話における理解過程

酒井 律子 個人情報の有効性がステレオタイプに及ぼす
影響

佐々木 典子 コントロールの錯覚による学習性無力感
(learned helplessness) 回復の可能性

柳井 誠仁 談話における心理的效果を与える時間的な間
の検討

守屋 政弘 説得における周辺の手掛りの効果の考察

柴山 秀一 ステレオタイプの判断の生起因について

杉田 勝好 議題設定効果の情報内容と受け手の分析

関目 実 自己開示の返報性に及ぼすセルフ・モニタリ
ングの効果

西尾 朝子 色彩の記憶における言語の影響について
藤田 恵子 自己評価維持モデルにおける関与と遂行が対
人的近さに及ぼす影響について

増田 匡裕 終結した恋愛関係に対する態度及び感情につ
いて

若杉 修子 グループ内紛争時における解決者行動の分析

岡村 有里子 広告を用いた説得効果について

紫村 次宏 ピアノ初見視奏時の音楽的表象の研究

倫理学

飯塚 将輝 怨恨・道徳の批判——ニーチェ『道徳の系譜
学』——

伊勢田 哲治 パットナムの意味論における指標性について

竹田 基志 ミル『自由論』における発展した人物像とそ
の意味

美学美術史学

荒木 浩 カンディンスキーと抽象画

鶴木 恵子 ゴシック建築の空間について

塚本 志穂 醍醐寺三宝院本阿梨帝母像の研究

金井 直 カノーヴァにおける新古典主義

白坂 智子 芸術作品の受容について

西村 道也 映画における空間と時間

巻田 千里 世阿弥の芸術論

出口光浩 カントにおける「経験」について

黒田 航 ショパンの場合——音楽の名づけと分類とに
関する試論——

長谷川 宏 ジョルジュ・ド・キリコに関する一考察

福田陽一郎 音楽における認知過程と美的判断

脇坂明史 現代音楽の様相

久保理莖 「エゴン・シーレ」について

社会学

石神和美 戦後日本における小劇場運動の社会学的考
察

梅津 徹 ウェーバーの宗教社会学の再検討

大崎 毅 ウェーバーの支配社会学の考察

加納言子 ミードの自我論に関する考察

近長邦彦 恥の社会的機能について

中里英樹 パーソンの文化理論の検討

松原聡朗 家族の社会学的研究方法

三上真理子 異文化理解に関する社会学の考察

山本茂樹 エン・オーニの組織論の検討

山本高之 ゴッフマンの社会的相互作用論に関する一考
察

高瀬智玄 ゴッフマンにおける「ジェンダー」について
の考察

橋本一彦 シュッツにおける他者理解について

広田治俊 動機の語彙の検討

村沢真保呂 デュルケムとモースの集合表象論に関する考
察

菊地文子 政治参加の社会学の考察

古沢範英 ハーバーマスの正統化論の一考察

宗教学

加藤弘量 ブーバーにおける「永遠の汝」^{なほ}

滝 佐恵子 ショーペンハウエルにおける「意志」につい
て

竹崎洋子 シモース・ヴェイユにおける神の creation
と人間の decreation について

西村雅勝 「純粹経験」における自己の死と再生

畑中健二 本居宣長の注釈的戦略

重松健人 初期レヴィナスの存在論的考察における実存
と実存者の関係について

佐谷健児 ウイトゲンシュタインの初期の宗教思想につ
いて

米山達郎 ルドルフ・オットーの「聖なるもの」に関す
る考察

仏教学

松内義孝 中論について

基督教学

武藤 慎一 クリュストモスの比喩解釈——『エペソ書

講解』二十に於ける夫婦関係の問題をめぐつて——

岡田 めぐみ キルケゴールにおける「信仰と自己」につい

て——『哲学的断片』を中心に——

山内 信二 信の本質

六 京都大学大学院文学研究科（哲学系）

修士課程修了論文題目

——平成三年三月——

哲 学

副島 猛 フッサールの他者論と超越論的還元の意味

森田 恭子 実在の水準——ベルクソンの知覚理論を手掛

かりに——

竹島 尚仁 自己意識と経験——ヘーゲル『精神現象学』

の一考察——

村上 俊一 原因をめぐるニーチェ

安江 将史 前期ハイデガーにおける存在の問について

倫 理 学

江 口 聡 キェルケゴール『おそれとおのき』における

倫理的なもの目的論的停止の妥当性

西園寺 泰 レヴィナスの他者と敵について

土屋 有紀 オルテガにおける個人と社会——『人と人

々』より——

印度哲学史

清水 由美子 プラーフマナ文献における説話類型の研究

——動詞 *apakarani* を中心として——

西洋哲学史

小川 清次 人間の権利と権力——ヘーゲル『法の哲学』

に基づいて——

坂下 浩司 アリストテレス『自然学』における必然と目

的

田中 一馬 キェルケゴールの歴史理解——受け継がれる

ものをどう捉えるか——

橋本 武志 無と存在——前期ハイデガーの存在概念

——

石田 あゆみ 体系としての人倫——イェナ期ヘーゲルの実

践哲学——

久保 徹 魂三分説の諸問題——プラトン『国家』に

おける欲望論——

宗 教 学

安藤 恵 崇 生の哲学と宗教の行動原理——ベルクソンに

おける「生命の躍動」と「愛の躍動」をめぐ

って——

大利 裕子 キェルケゴール『不安の概念』における罪に

ついて

仏 教 学

苦米地 等 流 Pancakrama 研究——Laksmi 注第2章を中

心に——

基 督 教 学

松 丸 太 オリゲネスにおける神の本性とエネルギーア

心 理 学

竹 本 篤 史 運動検出の最適移動距離と時間要因

牧 岡 省 吾 単語認知過程における文字位置情報の処理機

構

社 会 学

塚 本 利 幸 シュッツの間主観性論の検討

寺 岡 伸 悟 パークの人種民族関係論の研究

美 学 美 術 史 学

飯 尾 由 貴 子 ヨハネス・フェルメール「デルフトの眺望」

をめぐる一考察

稲 本 泰 生 龍門賓陽中洞試論

七 博 士 後 期 課 程 学 修 者 氏 名

——平成三年三月——

哲学……寺田俊郎、樋口善郎、松尾宣昭、松田克進、森秀樹、

吉本浩和

倫理学……佐藤義之

中国哲学史……小笠智章、柳田裕延

西洋哲学史……瀬口昌久、武藤整司、脇条靖弘

宗教学……秋富克哉、美濃部仁、森本聡

仏教学……栗原尚道

心理学……関口理久子、高井弘弥、竹西亜古、金潤玉

社会学……上村隆広、筒井琢磨、近藤哲郎、鈴木涼子

美学美術史学……太田明子

八 「日本学術会議だより」内容紹介

第二十三号平成三年十一月

〔総見出し〕第15期活動計画決まる

〔内容項目〕日本学術会議第13回総会報告、第15期活動計

四

第二十四号平成四年三月

〔総見出し〕 第15期特別委員会の活動始まる

〔内容項目〕 第15期の特別委員会、公開講演会の開催状況、地球圏—生物圏国際協同研究計画（IGBP）シンポジウム、二国間学術交流事業、

第二十五号平成四年五月

〔総見出し〕 学術国際貢献特別委員会設置される

〔内容項目〕 旧ソ連邦の科学者に対する緊急の支援措置について（会長談話）、日本学術会議第14回総会報告、平成四年度共同主催国際会議

第二十六号平成四年九月

〔総見出し〕 共同主催国際会議閣議了解得る

〔内容項目〕 平成五年度の共同主催国際会議の閣議了解、日本学術会議主催公開講演会、物理学研究連絡委員会報告「理論物理学の研究体制の充実について」

第二十七号平成四年十一月

〔総見出し〕 秋の総会開催される

〔内容項目〕 日本学術会議第15回総会報告について、平成四年度日米学術交流について（会長談話）、日本学術会議主催公開講演会、学術分野における国際貢献について（会長談話）

九 高田三郎名誉教授の御逝去

会 告

京都大学文学部名誉教授、高田三郎先生は平成六年五月十二日、群馬県吾妻郡中之条町の病院において気管支肺炎のため逝去された。享年九十一歳。御墓所は京都市左京区の法然院である。

先生は大阪府の御出身。昭和二年京都帝国大学文学部哲学科を卒業、同年大学院に進学、昭和四年より七年にかけて三年間ヨーロッパに留学し、主としてイギリスのオックスフォード大学においてD・ロス教授、ドイツのベルリン大学においてはW・イエーガー教授のもとで西洋古代哲学の研究を積まれた。帰国後広島文理科大学（現、広島大学）哲学科講師として赴任、助教、教授に昇任されたが、昭和二十二年、当時京都大学文学部に創設された哲学・哲学史第六講座（西洋中世哲学史）の初代担当教官として、京都大学文学部助教に就任、同二十五年教授となり同講座を担任された。昭和四十一年停年により退官し、名誉教授の称号を受けられた。

先生は学内において昭和二十九年より三十一年まで文学部長を歴任し、評議員を二度にもわたって務められ大

学行政にも大きな功績をのこされた。先生の御研究は西洋古代哲学と中世哲学の双方にわたっており、その学風は哲学と哲学史を密着させ西洋哲学の源流における古典的著作を綿密詳細に分析し解明してゆく点にある。アリストテレス『ニコマコス倫理学』（昭和十三年）訳注は名訳の定評があり、しばしば版を重ね

て今日に到っている。先生は西洋哲学を根本から理解するためには、単なるギリシア哲学の研究だけでは足りず、それが中世を通して現在に到っている長き伝統の中でこれをとらえなければならぬことを看破され、中世哲学の重要性を洞察された。中世哲学史の領域での御業績として編著『西洋中世思想の研究』の他に「善そのものの認識」「中世哲学史概説」その他の多数の論文があるが、最も特筆すべきは先生とその門下生によって昭和三十五年に着手され現在なお遂行されているトマス・アキナス『神学大全』全訳（二十六冊）の刊行事業である。先生はまた卓抜な洞察力と厳密な実証精神に基礎づけられた論文「プラトンに於ける自体と存在」（昭和三年）を『哲学研究』に寄せられる等、本哲学会の良き伝統の充実と発展に寄与された。

ここに、本哲学会への御功勞を銘記し、また学界への卓越した寄与を讃えつつ、謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

平成六年五月

京都哲学会

十 楠崎祐一名誉教授の御逝去

会 告

京都大学名誉教授、文学博士、楠崎祐一先生は、一九四四年六月一日、神戸大学医学部付属病院において呼吸不全のため逝去されました。享年七八。

先生は、一九一五年八月二七日に誕生され、第三高等学

校理科甲類から、京都帝国大学文学部に進まれ、心理学を専攻、一九四一年に御卒業になりました。ただちに海軍技術研究所理学部実験心理研究部に採用され、一九四三年には理学研究所から実験心理研究部に移つて、海軍技術大尉にまで進まれましたが、一九四五年退職して母校の大学院に入学されました。一九四九年大阪市立大学法文学部助教授に任ぜられ、一九五三年に京都大学教養部助教（心理学研究室）に着任、一九五五年七月には文学部に配置換となり、一九七二年には教授に昇任され、一九七九年停年退官、引き続き甲南女子大学文学部教授に就任されました。この間一九六二年には文学博士の学位を取得され、また、京都大学退官時に同名誉教授となられました。

先生の御専門は、知覚の心理学的研究で、早くから、知覚における範疇化（判断）の作用を重視され、知覚判断過程における種々の感覚系間、および感覚系と判断系などとの間の相互作用を追求して、両眼視野闘争の精緻な実験的研究等を通してこの問題を解明されました。すでに、京都大学文学部での講義に基づく著書『知覚判断』（一九七四年）に、知覚を広い文脈の中で捉える先生の立場が鮮明に示されていますが、『哲学研究』にも、数篇の論文を発表なさっています。ここに一九八〇年の論文「視覚の生感—心理学的知覚論への一試考—」の構想は、御逝去の半年余り前に出版された『心理学的知覚論序説』へと発展させられ、知覚を精神活動の一部として位置づける広い視野から、その現象、機能、および機構を捉える大きい枠組みを提案されました。

この間、先生は、国内に唯一の心理学理論誌『心理学評論』の創刊（一九五七年）、関西一円の心理学教室の力を結集した実験指導書『実験とテスト』の刊行、京都大学文学部心理学教室の研究成果を世界に発信する

"Brief Report from the Laboratory of Psychology, Kyoto University"の創刊(一九七七年)の中心的な推進役として、心理学の研究教育に欠かせない遺産を残されました。地味ながら心理学の発展に必要な貴重な貢献を果たされ、滋味あふれるお人柄で後進をお導きいただきました。先生のご恩を偲び、謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

一九九四年六月

京都哲学会